

〈日本 SPF 豚研究会誌〉

「All about SWINE」投稿のお願い

SPF 豚の普及に役立つ調査・研究論文および防疫、飼養、流通、消費等に関する解説・資料等の原稿を募集しております。下記要領にご留意の上、ご投稿下さい。

1. 原稿は原則としてワープロを使用してA 4用紙に22字×33行、横書きで作成する。手書きの場合は、原稿用紙を送付しますのでご請求下さい。
2. 原稿の1枚目には表題、投稿者名、所属機関名（郵便番号および住所）を記す。2枚目以降の記述形式は特に定めないが、資料等を引用した場合は末尾に「参考資料」または「引用文献」の項目を設ける。
3. 表は原則として縦罫線を使用せず簡潔なものとし、また図はそのまま印刷が可能なように白色紙または方眼紙に黒色で記入する。写真は原寸印刷が可能なように原則として横7cm程度、縦7cm以下とする。
4. 原稿の送付先は当分の間「〒305-0856 つくば市観音台3-1-5 独立行政法人・動物衛生研究所 小林秀樹」宛とする。

〔編集後記〕

「食の安全」は消費者にとって当たり前の条件だとも思います。この表現が宣伝文句として使われるのは誠実な農家にとって、とても辛いことだと思います。裏返してみれば、それだけ不誠実な生産農家、流通関係、販売者がいるということです。後者の例は日々の新聞を見れば瞭然であります。国外農業生産物との価格差、農産物の生産者価格の低迷、人件費や施設費を含むコスト増、農政のありかた、これらを反映しての後継者問題など、日本の農業の難しさはあるかもしれません。大げさかもしれませんが、消費者を騙すことは最終的に社会の崩壊にまで達するのではないでしょ

うか。農業をしているわけでもなく、ただ農業の傍らで生活の糧を得ている私が偉そうなことを言えるのも、皮肉なことに、誠実な生産者と不誠実な人達の存在があるからなのです。もちろん、SPFに携わる皆様は皆誠実な方々ばかりと信じております。

しかしながら、誠実な生産者も悲鳴が上がりそうな現状です。この状況を打開するには思い切った試みも必要かもしれません。新生豚への初乳の授乳は必須であります。同時に病原体のリザーバー（母豚）と接触するわけです。早期離乳や人工的初乳の授乳など対策もありますが完全ではありません。初乳を与えなければごく一般的な細菌に感染して大半は死んでしまうでしょう。生理活性物質やいわゆるプロバイオテクスなどを使って、初乳を与えずに育てることができないでしょうか。将来的にはCPにおいて、病原体（母豚）との接触を断って豚を生産するシステムがSPFの原点です。GGPやGPレベルの病原体制御システムをCPまで導入はできませんが、SPFの原点を顧み、CPでも母豚との接触（期間）をなくす（より短くする）ことは動物だけでなく、公衆衛生においても重要だと思います。こういうことを実証していかないと傍らの人達は肩身が狭いのです。

SPF養豚はより高品質で安全で安価な豚肉生産を目指し、これからもやるべきことは多々あると思います。それは、すなわち数多くの可能性を秘めた養豚だからです。

(小林)

「All About Swine」

第24号 2004年2月発行 定価1,500円

発行所 日本 S P F 豚 研 究 会

〒305-0856

つくば市観音台3-1-5

動物衛生研究所